



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
90 100 110

卷之三

卷之三

文憲ハ僕々溢る。齊の尚書令とさへり僕々多めり。而も太府と並ぶ府とす。

廻急 ありて爲めりて案内あく。ありせ

廻鶴國

（ナニラド）

車部とす。也

通鑑綱目註薛延陀其先匈奴自藥葛羅氏居薛延陀北安

陵木上元魏時号高車郎即當作部唐初爲勦勤諸部唐德宗時請改号回鶴言其

柄輩猶鶴鳥之鶴也唐書回鶴列傳云其先匈奴也俗多乘高輪車元魏時亦号高

車部云十八史畧六唐憲宗元和三年沙陀朱耶盡忠與其子執宜來降沙陀勁

勇冠諸胡每戰以爲前鋒後突厥其威於回鶴後迂之河外懼而叛唐置之靈州

註鶴本作鶴德宗時請改曰鶴今鷺鳥也取其鷺揚義云又云唐系於之回忽想

文玄等平河西原と兼う下界

七十九

平定附 大併陰與之東鑑建治十五年自弘安十五年至正安三年北條五郎時忠後改宣時系圖云時政時房朝直宣時執權永恩寺殿

最明寺入道時賴也上よりまく

七十九

原宣時鶴也をば遣ひ

年自弘安十五年至正安三年北條五

郎時忠後改宣時系圖云時政時房朝

七十九

卷之三

北金書卷五

卷之三

鵠奇 東鑑弟。一天後，召見院時伊
豫守源朝臣賴義奉勑伐安倍，負

八十

有冊祈之。甫康平六年八月潛勸請石
清水建瑞籬於當國相模由比郡今号
之下若官未保元年二月建陸奧守義
家加修復治美四年十月賴朝兵小林
卿之比山築宮廟波氏之

足利左馬入道 東鑑四十四云建長六年十一月足利左馬入道正義病懨已

危急之間爲訪之相別令向彼第給二十一日入道正四位下行左馬頭源朝至義大法名正義字系圖云義氏者義

康之孫**義兼**之子**母比條時政**之女

とくに食ふとえあへとまわり俗よもよき

一獻之禮賓主百拜

而語其三歸而酒酒以送
もありひ 稅キナリひ

信の秋ノモトリノ事
鶴罝別當也宗尊將軍御不

例之半到初禡加持僧爲交際爲是實
拜領義濃國岩瀧鄉被任僧正 东禡

之制入深酒
之制入深酒
之制入深酒

と自も用ひてゐるが
多くはよく似たる
如く餘約の如

うせを努力して、圓せよせてへんむのがまく
調せよひく、念をいづく、あらゆる

アラム人の文字

ひ段、大福長者う祠をすうすうあてかく
みてすうむとくろとむて金銀を多くせん
るも常磐とよし、一もとつゆふと通じり

ま今後はおろか段々僕約とほれで去
りの意欲うつて僕約うる人といふなり

般大能の人子全万金ありとどりとつとよ
やしらぬよ僕約をう類といふはあらむと

卷一

卷之四

最明寺入道。おとぎ愚入社。
サニ。乃次より足利。在うちの
カミへ先使とほりて立
つゝも。うらうるふあづ。ゆう
きよ。たうりくう機。一軒よ
うらありひ。二軒よ。あひ。三軒
よ。いもちあひ。やくわ
産。よ。ハ亭。主。婦。隆。女
傍。あ。ぐ。う。人。う。て
産。せ。う。も。う。り。さ。て。う。ど。う

約として下すもうまきと縫あを一とくも用ひ
きしんあわやうへいたつてあくままでと
あひては體よく窮どきて御事とせん
よりは財をくじんはあくとちうゆく
大福も着 その貴き運極あら者とち者と

天皇の須達も者月蓋も者以て富む人
紅華綻す。も者窮子の喻也。名義集
長者、西土之豪族也。富商大賈積財、能

万歳余長者

人乃ち仕内らじよ往く 人乃ひを
もふるもあらそかひつわくもみゆく
うりゆうとまちと観どくもすくられ 万ゆ
死もんといふねめりとむりとまめ
きりてあくまとりゆく
然うりあくひて 不意も欲もあり 事
なれも不意もいふとうきて欲とうなり
うありあく歎とりもとて 史記蘿秦傳云
且大王之地有盡而秦之求無已以有

盡之地而逆無已之求此所謂而怨結
禍者也。通鑑故以有限之敗以不可
成之莊子養生主吾生有涯而知也
無涯以有涯隨無涯殆已。而此語
勢不可不如此也
我とやうふとくを悪念
ありあふやうふてひやうかへうりと

久の薦度より
小要をもとめへりと
と遣へりと
五乃てく神乃とく
晋魚魯襄錢神論

日親愛如兄字曰孔方先生則負窮得
之則富強無翼而飛無足而走解嚴毅
居後云商財賄賂乃可也久りよきと云
くれるれども金庫のつきとさうて錢物傷と
つらり後刺せり善ぬよば謫乃ひとひと云
きもあれば
御のをじとも和をも重んじ人を殺とほりよ
きものあはくくくくくく
正直よしとくゆうとくくくくくく
ふあるくもじめをうまくううりゆう

乃の後ありとつまとあが
くも住むべくしど。亦取ら
ひ財^財_(宝)はくまかゆき。
くまりあふ財とりひてか
きくまうだ形よあくまう事
ゆべくと。而前んよまくす
事あくと。我とわづがく
き恩^{アクリ}合^スくと。と
みあくまく。ふ要^{サウ}_(ヨウ)と
ぞくと。汝^{タシ}と奴^{ヤシ}の
くまづく。用^シひ地^シとく

と人合ひに連とほんと思
り。まづく見えあると思
はざひと修行も下さるのみ
とよも他力事業ある
と人なるを徳のあひよ修
て。うりよも云々と觀ざる
とよられ。是も才一ノ因んで
才よ万事へ用をうき(ク
らひ人のをよあふ。自他よ
はきて。而前事もく能よ應
て。是ととくと思つ。百万

本を紀めててんとうく事うあたと
もうう。始まりのまじてやひを
畢竟と固く名ひてとの事へ
とくうけふき。是富乃まよ事や
えききみゆき。易乾卦曰水流濕
火就燥。從龍風從雨孟子曰猶水之
就下也。

宴飲多色。喜々あせきとあうえき
持人へあらう上大福也考の御とて
これよりあきぬう福也。論語註云抑及

語詔

箇あれよ。身ひまん。及酒ひる休吸
ちる後奴といつて。は屠氏よは是と有

射餘毛

病瘡を病め。もうそは無氣あつ肺物え
そああても。もとまくかくゆりあり

これ利きう箇と多くりとまく事とする

よるうしてつるあり。樂齊抄賢聖品
領跡曰詣有智者瀝采洗禪有が樂生
執禪爲樂。山河主くうううや

金へ富ヨ。すう。宴客へ財と本意とを

めひと富人へ財宴多うれとむが一尺を
ちうわまと宴共ふ天子と善文多着
も。足とて絶多富を安乐へとくとく富人
ふあう。

究竟へ程印よひと。天台家よ六即
あり。理即名字即翻行即用似即分身
即究竟即是也。程印ハ経法乃至多とも
あくね影地底下。阿九支乃至畜教主を皆
経道と具多う。伏乞へとまう印ハ経法を
つぶらばらうゆき。觀行印ハ座禪修
りともと相似即乞。菩薩の行はと
本義度。あくね影地の位すく。究
ハ妙空の位。影地へ伏もかハ九支をも主
く御る。すう。才の善法の位すく。究
洞未悟ともとまほ善く。又有為成佛
作作慶。為迷倒之底生ともとま

太極の多能アヒト。聖濟總錄百九十
九日欲生則三尸生。欲滅則三尸滅。故
至人曰欲者不欲不欲者欲アヒト。參考

懲食乃人。此生欲也。一紙手稿代
太極の多能アヒト。聖濟總錄百九十
九日欲生則三尸生。欲滅則三尸滅。故
至人曰欲者不欲不欲者欲アヒト。參考

北金指卷五

卷六

とつやもといんときれいに生れて金を
乃堂より、百味の飲食とうらへた樂は
あらんとの爲めあると生づまく布施が
きくわざを教へてからり○或人の云ひ布施を
すましの爲めにえのこづかよへうきしき
の大歎へお詫はせりといふととりもあ
つふとさへなりうるを從うりとどり
馬鹿もうちふじ木福良者の大歎へ百方乃至ふ
ありとも一箇もつゆぬるされも是繪の用
とあはれとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうと
てつうねとあくしてつうあとあく富こうあうま
よけうり絵ありもくううあは我れとせまく
ふくをれもあまきを繕うりせうりせうり

蒙古文

お嬢様よほ段ハヨリは人をもてぬものとゆふ
事もござり奉事多きゆゑにわざとぞ
せんへめふううむれきり

八十一

人アラハラヌクムタムモウテカラハ
うきよべくとゆえをまリ。
諸願ニ
歌歌叶欲ヘ
よりハアド財アトコトシソノヨハ
癰疽ヨウノトヤムホムホムアムヒ
てたのヒトゼントヨリハヤマ
ざくそんヨハモアツフツモ
究竟キヤウリハヨヒ。大能オノノ

シテ
キツネ
ハサカスモトバカリ不可。ミカラニツクモソシ
物事人よそひはくもの。接
ひ處よそく。今ノ人アレ
より

基湯大納言口父也
車のりあ 仁和も哉つゝ一 言えちもと
ちとの仁和もづりか乃くふせきこじもと
四乃くうやともすもせきと至もと龍安寺
より嵯峨へりよ龍安もんかゑのくふわく
聖と聖の場とづりげふ乃くすく
ちにわちもえーを堂乃ちとえらはれ

孤よくらまかにむかひそ
ゆきも乃がととくまか下
よきとみ三^ミ落^{ハシ}
つまくれど刀とねえと見

かくはいふにあらう。まことに、
かくはいふにあらう。まことに、

三
主事者曰 余吹へゆり
令せしもて 飲ハ食ひりとそ上より作らる
けりと通ひのこまへる
鶴林 世を主民樂人の事とくわく地平人
世を主民樂人統林 うじん祖そり世を主民と略して
世とちく
西よりて 世を主民とす

う紀もの也。先自ありていり。
く短氣タメリヨ乃シテそり。さくわくえ
涼クモカ乃シテすたゞしども様ヨコアヒ笛フジ乃シテ

卑下の御事御多用にて御坐と申す
荒涼色云乃はあくべこねより諸般御あり
様箇考のよきのよきの元へ于レヒヒ乃

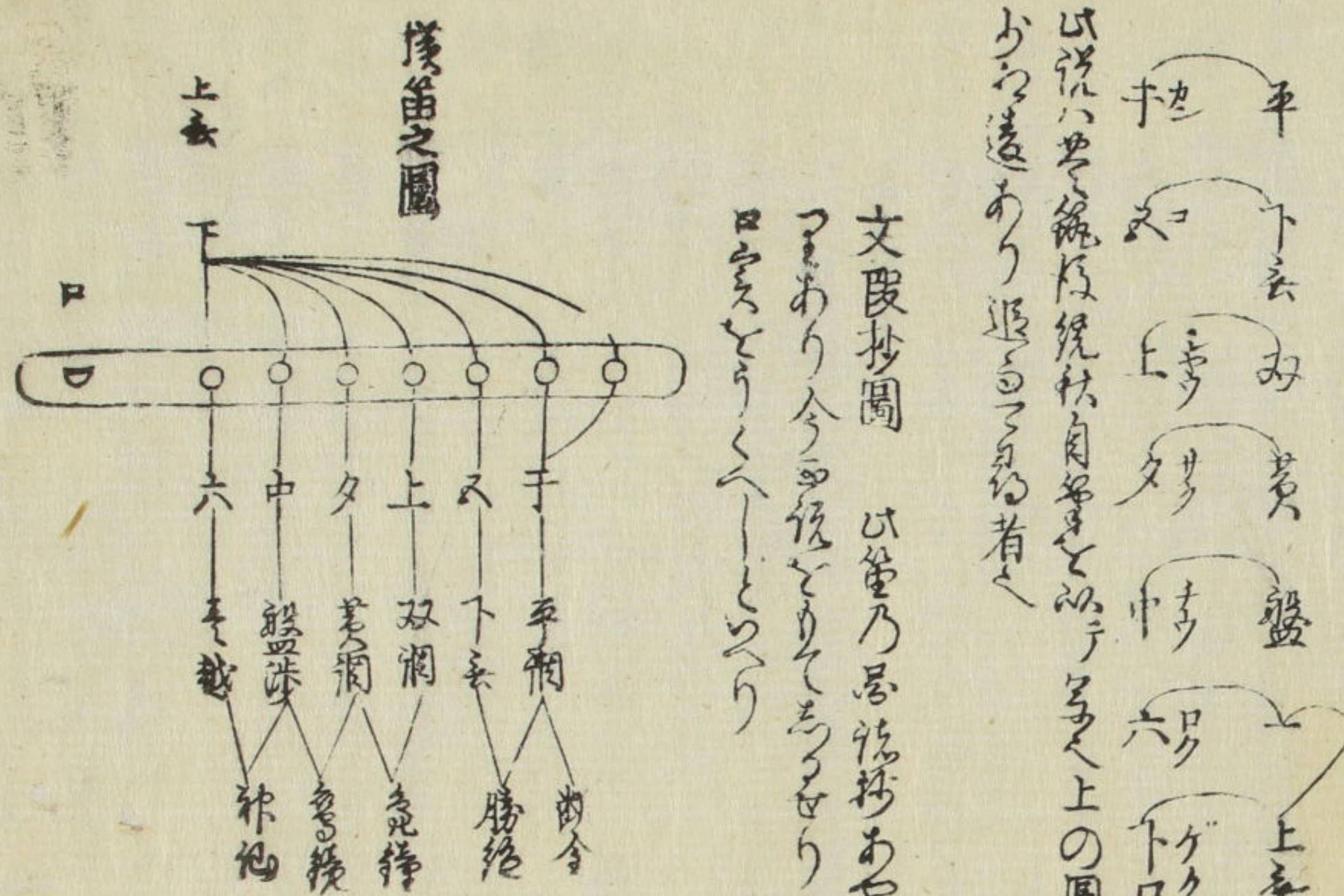
呂氏充之

十二律之次第 壹 越調吐 斫金調月
平調吐 勝絕調月 下無調吐 雙
謂吐 皐鍾調吐 黃鐘調吐 雙
調吐 盤逃調吐 神仙調吐 上無

トロとハキタマニ
トウモロコシ

六中爻上五下
○○○○○○

又乃穴ハ御^{イサカ}ノモニ而乃
竹^{カク}かとひそふ是と有り
ミル^カルハ干乃穴ハ而^{アラ}御^{イサ}ス乃
穴^モト下^モ御^{イサ}ム勝^{キツ}絶^{ゼツ}
洞^トあ^セぐてあり。上乃穴雙^{サツ}
洞^{。次}よ龜^フ鐘^{セウ}御^{イサ}ムダ^タ
乃穴^{ツウ}苦^{ケイ}經^キ御^{イサ}ムダ^タ
鹽^{ソシ}湯^キ調^{シテ}中^モ大^ヒとみある
よ神^{サシ}御^{イサ}ムアリ。うやうよアリ
に皆一律とねど無^{ナシ}アリ。



The diagram illustrates the three views of the human body (上圖, 中圖, 下圖) and their corresponding anatomical parts:

- 上圖 (Top View): 头 (Head), 胸 (Chest), 腹 (Abdomen), 臀 (Buttocks), 盆 (Pelvis)
- 中圖 (Middle View): 胸 (Chest), 腹 (Abdomen), 臀 (Buttocks), 六 (Six), 下口 (Lower Mouth)
- 下圖 (Bottom View): 胸 (Chest), 腹 (Abdomen), 臀 (Buttocks), 六 (Six), 下口 (Lower Mouth)

Below the diagram, Japanese text discusses the relationship between the three views and the 'Kanjin' (輪筋) and 'Kanpo' (輪肢) systems.

は後へやく輪枝系統自多とみテ是より上の圖と
かう道あり退の可む者へ

文段抄圖 ひ筆乃墨抄もやま
つもあり今西後どりてもとよりね
ぬとくへーとづく

又の穴乃とよのうらふ涙を
もといふ。そぞもとくろ
事半ひと。記かよそもあうふ
はきり。さきどこの穴とゆく
と記ハ必乃ナシタガノケル。のああへの附
ち物モノ。ありば。ゆうか人ヒト
とやトヤ。料リョウ管カンのりつり。殊シテ
是ニ龍被が詞掌ニ
よ興カウあり。生シテ連ツキね生シテとを
ふとつづ。じ事シテありとる
き。休カタマリよ景シテ歳サヘがゆく
筆シテへも。かやせてりもれ

少金才著

石審へりあらかとく

ひそくお見とらむ
龍林里下乃向
一律とねもとれども
律を調子乃事だ
いつまわるを當一調子つゝてきみ
圖乃そく 因子は呂律乃もりあ

龍林異傳
律を調子の事
一調子つゝてそ
よ呂律乃もそ

多一律とぞありついても呂ハモカレハモ
シテモ。漢志云。陽律爲律。陰律爲呂。律
以統氣類物。又以旅陽宜。氣呂皆曰。律
陽。統陰。云。未吟役。かわ乃。まのそ。よ
ヘ呂と陽。ト。未と。律と陰。ト。秋と。之
是を未わとのウリリメ。ヨリヒ
ト。ト。ト。ト。究。ハ。ア。ル。ト。ト。ト。ト。
必のくと。口との。ふ。義。と。呼。ニ。由。と。モ
る。と。ヒ。リ。ち。ミ。

秋と暮れ門内や先をもつて
生を盡しむりのをよき人をえほ生
ハねく乃をよき人をえ
ね生ともぞう 論語子罕篇子曰後生可
畏焉知來日有之不知今也

奈良
大林氏八幡の山乃井とよとよとよ
怪也と云ひも萬代池下の樂人よろこひにんより
又善好奈良の後と云ふ事あり
あくちやせて 番へ度ちがふれともあねさ
まふひじりく 腹子と食てとけもとくま

性骨 天性も骨とえようと云ふ事多
後とくらきりゆう 吕律のものから
難有妙肯若无妙指然不能豐汝旗衆

金の不動院は元々御本堂の前殿で、現在は本堂の前殿である。この御本堂は、元の御本堂が火事で焼失した後、1924年に再建されたものである。この御本堂は、木造の建築で、正面には大きな唐破風の山門がある。境内には、多くの樹木や花壇があり、緑豊かな環境である。

は限とも律のよりと滿せり

あゆよとすまるとくに記の元事
釋書よもく

樂人等の事は後葉人との
國とちくへ 開か入國とよき國行ふものと
之也 即勘定規とちくへ あまこつて人の
事とあらへどもとよき國行ふものと

六時堂 天未明の頃より晨朝 日中 午後
日暮 略記 中更 後更 ありりとてひつ堂へまわる小路 横

をも。まことに。萬へ充
あづまひうらうりよて。がの
あくへりてゆくわなれ。充こ
とふ口傳。さよ。性骨。セイコツ
くりて。しめつゝ事。え乃
充乃。ふう。と。ひと。よ
の。と。ち。り。よ。さ。と。ひと。よ
ら。あ。ま。を。じ。づ
充も。あ。ち。よ。い。だ。上。き
いづ。き。と。も。よ。き。あ。く。に。昌
律。乃。ね。よ。く。ひ。ざ。く。か。ハ。ノ。

卷之三

卷之三

卷之三

あくととやうせ
のくともうりもうもしーと 龍秋
首柳巖經日壁言如琴瑟笙簧琵琶

首押嚴經日壁言如琴瑟笙

卷三

まうふ御とくわゆふむうを之

行事も遠去を
く

舞櫻あらえやよもじども

之も天王の八仙人の門徒
焉ち乃樂を以て圖と

祐夜中夜後夜ニ
モアセテ、物入りて

北金華書五

卷之三

あらわしもまへり縫ハ一とせの美上よみ
くわくとくわく

下千五上爻中六
一越平調下無妄
斷勝絕
十二畢且黃鐘爲主
註曰黃帝余伶倫爲律伶
鳳鳥之鳴以別十二律
故黃鐘宮律之本也輸
十二黃鐘律宮聲也宮

源頃

平下双黄盤
千五上火中六下口

自筆寫之上圖說以有
相連追而可尋空若也

百獸爭乳是時
如是常心ヲ說一

聖灵會 令子の忌日二月
天主より奉る事と爲り
務めと爲り まことに

指南の車へ起ひ萬帝金丸と
あくしひ乃由よ金む左方とやせ多ねを士
卒の方角とぞきひ 賤萬帝つこうせ
車より多くぬり上よ人形あそび人形車を
移さむうして左角ともぞ あくらス

國之子也。不以爲子也。而謂諸無相棄倫也。

云々の御事
天主の御事は祇園祭全の事
八五三祭り 云々の事
祇園祭會 祇園を八百石 天主乃祇院を子乃

軍を以ひ大權那須連も考核金をとりそ
れと構へましんとくに彼陀をより軍と
ちとひりよ彼陀ちよ戦て食とせよ
ちと須連はあくべーとつうべー少須
連ももじてげ地とととふがよめせりと
ゑされど紙逃たる我さうされよつひいとの
もひくふ事ひとうりは内首連とつよ人
ち下乃深義とすうりたまうり法とても神

九金書卷五

卷之三

あらわれもまた縁ハ一トセの矣よと矣
くわくとあへ

美徳を備へもあらず。又後抄云某人経ハ律の
中下ありとまふはよめう徳みえりとくとく
え、選玉前賦云十二罪具黃鐘爲主註
善云呂氏春秋曰黃帝命伶倫爲雀伶
倫削十二簫聽鳳鳥之鳴以別十二律
以北黃鐘之宮故黃鐘宮律之本也輸
日六律六呂爲十二黃鐘律宮声也宮

爲君故爲生
八月十五夜月
源頃

暑日よひすゝひて　室をあけよと鐘の音をま
暑日よひすゝひて　上_九下_九

十一之四云師子吼言世尊如來何故二月涅槃善男子二月名春春陽之月萬物生長種種根裁花果敷榮河河盈滿

百獸爭乳。是時衆多生常想爲破衆生
如是常心。_子說一切法悉是無常。_{多云}
_云

天王もひよ衆もあらと見え
指南ともと さうるのうす乃もまことか
もととくと 指南の車ひ起ひまつ帝金むと

あきらひ乃付よ金むき方とさせたれど士
卒三方角とす。まことに。付萬萬帝つくり。其
車きりと多角の上に人形をそそげ。人形を
移さる。まことに。方角とも。まことに。

國公つうりきふとよひのり
いづまくらむちうそとくのく
兒諸無相集倫ル
尙書云八音

まきの御事　やまとわがはよ祇園祭全のみ
八月廿九日　まきのひにとく

軍事の如き大檀那須連も其糧食をとりて
之と構へましんとく祇陀ちよ乃室を
ちよそひによ祇陀ちよ戻て食を堪え
る事無事也

至りもよひてばどとふがよめせりと
ゑづれと紙隨とよがくうれよつひいとの
もひくふ事ひとうわうは内省隨とよ人

卷之三

ありやうもと價どてふきりまうそれもくしりあるやあらへうもとと終よ須走金坂
却く地をひくまわらる委不見^{ハシタ}後^{アフタ}二^トよ乃えあり聖祖よお
縁覽十二日綠院中^{アリ}有大金鐘風吹音聞八里迦葉佛時毘沙門天所造每至四月
八日鐘能誦迦葉佛涅槃經^{アラマ}四衆咸聽之
精舍 おあひのゆふと云儒者わ家
ふともつてす^テ釋氏要覽曰釋迦譜曰息心^テ所接曰精舍藝文類聚曰非^ム其舍精
妙由精練行者所居也
無常院 西域傳曰祇桓西北角日光漫處爲無常院
若有病者當安其中意爲凡人内心貪著房舍衣鉢道具生^キ憲^ス著^カ心^ハ無厭背故制此
堂^{アラマ}今聞名見迦釋^{アラマ}一切法無彼常故^{アラマ}云
公經公家 东方もろいの法勝もろい五丈堂入^ル皆^ハ捨^ク捐^セ一^ハ衣笠^{アラマ}良^ハ太政大臣
ふるタ東邊九十九^ノ御不対^{アリ}
淨金毘院 つまひの南うつまき角東^{アリ}淨金毘院^{アリ}
捨^ク移^シ云本名天安寺待賢門院御建立也淨の主とほとくに乍^{アリ}淨金毘院^{アリ}
乃推野^{アリ}よりのゆ後^{アリ}云まされも山^{アリ}内^ハ大庭のいとあるもあそ^ハ一^ハ檀林もと
ひといとハ破壊^スくつとくもくらふり^スれをそのあら^ハ淨金毘院とつけ堂^{アリ}三^ノ勢
きうち^ハ上人ともちもあまく^スれく淨^スまどをすう^スく
山段^{アリ}かともあま^スくは^スり^スめ附^クかき^{アリ}也^ハ十五
建治弘安^{アラマ}元^ハ比^クモ^ハ日^ハノ
みさうりのあとこうつまても^スきま^スる
ときとくもくえよさく^ス町入^スうづ
うりともものあひよちひう事^{アリ}
事^{アリ}よあくすま^スきも^スりてや
と雲^{アリ}あり

建治ノ安
豊後守の書
かとひきうの見

建治弘安ノ比も。かの月の
初先のつもわよ。とくわう
き。紺乃布。せふ擣。てまると
ひくりて。鳥。春よ。ひさう。

放免 東鑑二十三年六月將軍
家實朝任大將爲拜賀參隨岡隨兵江
判官能範布衣冠革縮細尾韁太刀郎
等三人雜色四人調度懸一人放免四
人 久猶云はれ矣今のせよもろく也
もじ一筋のみナのちもテモ一つとあ

スイカニ
リモノエ
放莞にタニシ
ひてまくらとすゆふせんと
ひばりあざくは無ありて

くらのあらまゝあつめにつきておん
くのせよあまううぬはつきとよそ
もうちくひんがあのき
る志レタス
歟原下 **檢非違使の下**
道志 **有** **法明道輩六位** **時任衛門** **志即**
蒙使宣旨 **也** **凡志者奉行使廳諸公事**
之故以當道爲其撰此号道志也明法
道のまほ候處の志とさうを馬左衛の
志くらとて忘とつて
つるものあれりてよりとめつまむ
上よねあへつまむとあるよもと
色差 衣服車るあひまきりは今よも
くらまぢり

也亦可。海內外之書

增補
北金石若王

卷之二

レ段ハ多教房乃我家もくスヘド
ナシモアと然や多てモリモリ

竹翁
東二條院 伏見ニミル竹翁コトハシ ベシカ
きの盤升タガメ わゑ 宮家ミヤヒメ ひの息女

宋子淳事也

真言宗
集よハ
と云ふ

酒石集二下云醜醜入行告入
棄軒房の上人ハ渾古宗入也道とゆえ
此鬼も名号也

モニ亡魂の菩提塔とシテ毎日ノ供養
モニぐれそと勅宣ノアリシトモハ冥院
宇隣尼寺えぬもそのとくれそトモト
奉事トヨシムアシマスも云ハ不よ云ス儀
輒ク後よ地獄よおちて苦患トモシモ亡魂
よじあらそ一遍モトモ回向もされハ無事ま
如來はこ魂よ無どきうきて後承世界へ
引取リ後ナトモトモ況や十二遍誦セ
ん功徳モトモハヒト後ハアリ又亡魂
の差下シまじまと年九遍誦して姻

向まれて乞うまぢまじと肩へ
てあくらくすいゝ行ゆる時と従き又經
りかよハげ落座尼尼と満て去沙とがおす
る一百八遍一にて去沙と墓やよちて
死骸よちせてもめうちと墓やよちて
冥魂と転ぐ移すよもよととくわく
寶蔵仰陀羅尼　　寶蔵乍落座尼経とそ
あり沙る集云十惡又達の罪人死後ア
墮てまゆるふぬまよまよ跡あくそ
は神咒とよづよ七遍満ての亡魂小廻向
されも忽も洋銅幣大鉄事アシクハ功爐
乃池とうつ華生ノムノ思としけ裏蓋
アシクだよとくまうてまをもあがつとして
須臾のあまくらくふまうて一切般若を
持く佐補處アリありとぞれ

称名
法華会努力
追福
巨益
ゆりふくじゆうめい
文段抄えは段の小ねとの灯籠をこむ
終るゆくとうえ入がトヒトヨリ難よづ
りがともも鷹羽をすれそとひよま後を
一とくよわくとあくせく

竹谷家教房

一
命を失つたに亡者六
追善より行事事う傷利か

かくと見ゆせむれば。考的
ゴシホウトモウイニタマラニ
其云實也。下池屋尾也。

アリハタマトモト。ササニシキ
イリハクヒヤ。タタキタミ。念仏
ヨウセナミ。タタキタミ。アラタミ
ハタハタ。タタキタミ。タタキタミ。
モ。我ハタタケタモト。タタキタミ。

善と修業を爲す事は、
身の内に於ては、
外に於ては、
必ず人間の心を
善くする事である。

巨養ありべとせう。權文
大利一
もどかんとよびよじ。行ふ又乞
あううとかまひてともせぬ
り。つぐやうさんとやりひて
車籠乃。うとうふつまそ

卷之三

古今考略

二
ニ

秀忠の生れ
は多忙の爲公ニ男九条内
府基本家公号_{アキラ}^{アキラ}及_{アキラ}^{アキラ}二号_{アキラ}^{アキラ}沙倉大臣_{アキラ}^{アキラ}井姓
がともと歌_{アキラ}^{アキラ}田乃_{アキラ}^{アキラ}之_{アキラ}^{アキラ}八十八
以段_{アキラ}^{アキラ}之_{アキラ}^{アキラ}小地_{アキラ}^{アキラ}をもくもくと
トモウタリ_{アキラ}^{アキラ}木僧正強法印不_{アキラ}^{アキラ}可_{アキラ}^{アキラ}破_{アキラ}^{アキラ}思也

安倍晴明す又代の孫也
さうり 陰陽顕正三位
あつひきうて 魔ねりとく軍事きよ
ゑとあらもひへうづくすとつよし 論語
憲問篇禹稷躬稼而有天下ナツタマ庸人之道
教受也直文アラシテ

毎歲北道每櫛
くあう。うね事すあり。を
そはまのひうふと、なつもじほもみちひりあ
て。うれまくあよはくうりき。どつむえゆうき。遂ます
乃地をもひきよきん車へ着きぬる。今も葉落舞

どばう人をくぐ
は段ちゆひやへ入船源をありせう
三九十九二三段りの、がろとづく

卷十九

多氏よりとも作へよ多の氏あり朴氏
帝の子朴ヤサヰハ多氏の主を祖く
通憲入る 少納言入る信爲之法るよ邊に
る人より平治元年十二月十三日信爲
乱遂時信西見シテ天変兼知其災入大和
多原山自害入棺不死前被堀埋土中
同月十五日伊賀守充保忍オヒ不獲進
即堀出死骸斬首渡大路被梶嶋獄門

じゆす平至治元年より
實兼サキタクマ 南家と勢力后胤通憲ミチクリ
覺 隆兼 憲實 憲基
元亨釋書北九アリ
じゆす鳴道のる
聖

碑額附源義注東鑑六文治二年三月一日
蘇元勗妾靜及母磯禪師自京來于鑑倉
下鑿之

ひきへりうれし
爲帽すとまくら
多幸めむ跡
絵作乃由来歴記之
白痴子の聲
原率成長記十七云世よ

猶子とのまのを滿や望み、農氏楊牛凡王
聖也とひき落毛を抱ゆ、我物より

曾共追長五
九三

毛羽院清きよ嬌りよ嬌りよ嬌りよ嬌りよ
人の菫女と舞うと舞うと舞うと舞うと舞うと
久助と舞うと舞うと

源半野

源也も大監物は毛羽院の小面うり

從五位下漢のまえ御う男原氏物也よら内がとうふはげ人の他

冠もひの舞女るり處のあらそもくほ毛羽院もう毛羽院もう毛羽院もう毛羽院

それとも義時同人せまうゆく氣を九十

毛羽院の毛丸起く東鑑九五ニ委

信然ち同乃ち

系号未詳

鶴弓乃卷

鶴弓乃尚書の堯典よぢら

又は源書也植榮日今日所蒙誓古之力

也是を学る乃力也と云矣又九選東都

賦曰憲章誓古註憲法也言法其舊事

考其古事云

七種の舞といひ唐乃天子の舞といひ秦王乃て附
列武周を歎りて軍中相うちみにあり
破陣樂とりへ曲うりもくほを毛儀の節度
よみて宴會の舞によハ必ひ曲と奏一回
九八人は銀甲をも身軽戦とめりてすうり
多きすんニ舞毎度は陣をめぐる軍の
体よもとれどもや是をほよ坂井坐ま
正月よりとあくまで七種の舞といひ

毛羽院の舞といひ唐乃天子の舞といひ秦王
易は七種の舞といひそつくりとぞ
けの舞といひ被ふかみの七種の舞といひ
舞もととくあくまとむじの七種の舞といひ
毛羽院の代八ノ寺二代乃きへ名を毛羽院
民とぞり十八史略五唐太宗七年云
春宴玄武門奏七德註六通鑑註太宗
爲秦主時破列武周軍中相與作秦王
破陣樂曲及即位宴會必奏之以百二
十八人攤銀甲執戟而舞凡三變每變
爲四陣象擊刺往來後更名七德舞
七德左傳宣公十二年傳云夫武
禁暴戢兵保大定切安民和衆豐賊者
也社頌註云此六武ヒ七德

冠者え服せり人を云え源氏又旁ると
え根乃段くもこの玉とくとくとく
毛羽院和尙一藝也

九品判友

毛羽院和尙

蒲冠者從五位下三河毛羽院和尙

蕭生沙厨出生して号蒲冠者。於翁丈文治ニ承教伊豆小條依令見源二位余

教跡

武士トヒテ しまふも發合せり。も

此段よりてとく事を知れとお濃よ考究
を義経ノリハ多危れの事ハ略セリ。勤
修も専門十三代の孫矣。多時も至る。勤
修化者の所一よりと云。補住より。それ
八四十八卷の盛衰記より。し行長。はく
きくハ十二卷。平ある。生ぬ。めぐり又

信向。よ。年。勤。勤。一冊。五六人の作者を

載さり。殊。僕。か。か。と。信。用。ど。ふ。く。

そんば。勤。修。よ。移。す。と。盛。衰。記。と。

九十一

平。あ。と。一。事。の。う。ら。よ。不。向。も。有。り

け。段。ハ。六。時。礼。讀。は。ま。一。禮。お。と。称。名。と。も。る

由。も。と。づ。り。

六時礼讀 聞の事を法華寺としと

じて。並。華。漏。と。こ。ろ。と。六。時。と。礼。せ。一。六。時。

金。松。の。禮。興。と。い。唐。の。事。六。時。礼。讀。

偈。と。え。と。あ。つ。先。て。自。在。の。勤。り。と。之。

あ。ふ。危。き。り。と。ひ。ま。危。き。り。よ。と。停。

ム。あ。の。人。や。き。

宋。梁。法。華。寺。の。才。子。と。優。華。寺。寺。主。と。う。ふ。二。人。

礼。讀。と。と。と。て。極。す。乃。ち。贍。那。那。集。せ。一。ふ

ま。を。食。や。く。お。か。せ。一。く。ハ。ほ。も。福。院。奈。

蓮。舎。五。そ。に。作。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。

秀。慶。は。作。く。内。系。河。系。と。と。安。東。と。漸。は。

名。教。住。高。六。江。列。福。院。と。と。と。と。と。と。

そ。泰。廣。隆。寺。出。泰。氏。の。人。事。く。も。と。泰。

太。泰。寺。と。泰。

善。觀。房。傳。記。未。詳。

ナ。シ。モ。サ。チ。

章。を。そ。して。三。毛。ひ。上。下。毛。縫。と。う。ひ。

念。絆。法。事。讀。每。卷。上。下。十。九。是。し。善。導。作。也。う。毛。を。う。と。う。善。觀。房。傳。記。未。詳。

福。院。仁。王。八。十七。代。九。十二

多。年の。持。き。念。絆。千。手。の。持。き。や。う。だ。う。と。二。

月。内。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

号。を。と。う。う。う。

文。承。通。身。度。身。解。

ナ。シ。モ。サ。チ。

ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。

ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。

ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。ナ。シ。モ。サ。チ。

妙。觀。九。草。釋。書。云。勝。尾。寺。講。堂。觀。音。像。

寶龜十一年七月上丁日比丘妙觀刻之千臂千目莊嚴端嚴又加四天王像凡五尊三十日而成八月十八日妙觀合掌而化觀音之靈應也仲芳攝列勝尾寺

加四天王像凡五

加四天王像凡五

尊三十日而
暮綠疏淡妙觀雕像の如きたり
ひそかにと
ひそかにされどより

五條内裏　日祝破曉時向左方ありといへ

藤大納言　あま氏大納言も此へあり
とありへりと今へれ劫アリと
未殊　鐵舟也未之未　臻アリムハ功
のアラセモアリ

ひやくあれも旅人のやうはいわくらうのをきたまふ。
あきこゑつりうしがくはきて。すくひしげふくろ。東廓乃
王のあそび

文臣抄
一
うして奥あくんよりへぬ、かくもあ
まきよそりあつゝはらひしらむと
おもての義を爲す事なし

卷之三

墓碑に天福二十一年十一月十
日上等林生家法名圓空号六孫号うきり
とくのむすめ 素知く

庖丁　日本庖丁者のもとへんは、事あひ代慶
流山蔭中納云也。菴子養生主篇によ庖丁
牛と解すと詳よきり丁氏とく庖厨
のよと知く寧尠とくゆへよ庖丁とく
斎刀をも

百日乃經（百日乃方毎日つてあると經とき） 程縫とちく庖丁とあらすじの
之をか傳

蒙古語彙考略

一月の事は、
あまくやうのう
よからぬと
ねま百日祝
ひあくじゆの事
面白くもやうと

2

增補卷五

卷六

きよ者のみへ あくまくハ父と子にてえ
父と子あらば、我智とそりやうか
うハもやうよせんととくもゆき
ゆきを智あつ失といまつ失ふ
ト學日長者不_レ及不讒言註讒雜之言

くはすくう。そひ者れ
あまくへまどこりと見え
サワカラスルト

也。又孔子曰。鄉黨よりあそハ恂々如と
し。其のによりあくハ勇也。又似たりと
言ふ似たりとハ才とへり。又て賢智
まゝまへ石なりと考す。往よ
あり句解より。引りつね

九十七 又あらわ人の許より書
異本六上ト同版

少段ハお段ヨリ勢の先と云ひ即ヨ又絶の先と
えと彼處は階段もとて人ハ至難をあく
えむれたりとつりとよもや文段抄
又少段と一段とせうなあり
ひは仰ろれり まもれれきし
ちう 芭のよそ琴くくハ一くらとよし芭
芭くくハちくとよじり芭とのともふ
あくり樂人のびの枝ハ寫りひとほ仰
カ枝ハみりあり
あきいきの柄ありや あれあくハ枝
まうんのり

男のやうあれども
ゆうがふるえひまの柄エと

ガムシモミクアヌミテムクアヌ
シムクアヌミトソリトシムクアヌモアリシホの心
は段ハちの本段の心とうきて人とうま[九十八]

トリ前をさすをまく人とうまく誠と教よ
スとくへたり人とあふうりんをハ教を
悟ルムシモラムシモアヒシモアヒシモカ

万ノトガアムイシムイシム

論語多聞闕疑慎言

其餘則寡尤

又日言奉信行篤敬雖

蛮類之邦行矣

ナムシモ氣き身のされぬる所ヨリ傍善
を人なり信ヨリもラスレテテ云起

ナムシモ氣き人よりよきれ
ナムシモ氣き人よりよきれ

サヤウヘル

ナムシモ氣き人よりよきれ
ナムシモ氣き人よりよきれ

[九十九]

人のめぐらひふもく人
ホメタル

ナムシモ氣き人よりよきれ

大原治 神有帳又ハ多社と云をもの
申乃大社ハ日本記には未だ西鳥の未だ也
貴と云ふといひ亦被令又ハ未だ西鳥也セト
ソリス株春日神トモ足利也

あくのまふト志方の某

あらふ源氏ちうはるときありそ

季湯上人 信記末序

ゆきぬ 章真詮とく誘因へ源氏す・おお

おもえ さあ一失せんきり田全の風情を

うひうちわ まくよ

柳子狗天 文段抄云是社よかとぞ禁

人以てこぬれりうろこ木の木とある

て木とあらやうと起立式アヤリ是日

本紀よりの太刀附金の苗裔きりひゑふ

林社ニテシムシテモうち儀のんと

いふゑゑ 国の人民上人云頃

教のほど 未入もあらず万葉

とくまにまつてのうまの人民ハ山やこ

八つまひひとといふ

さとうひ 悪の事

奇怪 曲事也

風也く津勝の事ハ佛徒ノトドモども亦下なりと

つをもめくあやしき。識よ他よととありたり教のつと

よきもんなどりよ。上人れゆくがりてがくめくの

うりねがくもくれく。か神愛とよしてげほ社ノ柳子

てくもく風う。まくもくもひあるふとふねくんちと取

ちやといそれれぞとま事よひ。ざくば(サクバ)モヨウラリビ、どその

けりうう。奇怪よひゆううりとてまくもくの

てよきれど上人の感涙づくよきりにまく

柳子(ルイ)

てよきれど上人の感涙づくよきりにまく

柳子(ルイ)

てよきれど上人の感涙づくよきりにまく

柳子(ルイ)

てよきれど上人の感涙づくよきりにまく

柳子(ルイ)

てよきれど上人の感涙づくよきりにまく

柳子(ルイ)

てよきれど上人の感涙づくよきりにまく

柳子(ルイ)

下學集柳箱 編柳枝作之

一尺四方

九金社卷下

卷之二

此の事は、
じ段ハ多モ自便乃と例として七百二
ト余あづくわゆも多からぬも相手を
と相せ一牛とされ多き也

は段あ乃秦の主弱り徳と能る乃相
ありとソヘトカウトカウトカウト

落馬相。鐘鎔。論語文。額窪八災尋人夏不好也。支上セツ
其一也。七あり。一人りまくつきて。ひ見え。わ
サイ。シヤウクハナ
つまくよ。えれ。物。充。院。大。多。

兼好観て
うそかねと見てと一言も
ちゆうわくうそだ。まことに
てあらうともうかに。又もせん
まひこく。あがへ泥古のやうもうびのまく
うあくまくざるひとふか感を
兼好詫ニ

蟲代 桂醍醐院天皇也 まめの後りきくへ
坊 美玉坊うり伝ようやきひてをすそ
あらはう内乃アヒトとどり

其二也
一
商代以來之切口
中
北。方里小海處也

堀河大納言

師信公之後醍醐天皇

乃更きり師継公のよへ花山へ庶流堀河と号ひ

け菖蒲子 烏のよへ万里小篠の傍に堀河

大御衣履候へとひて之休息乃を

休息へとひて菖蒲乃用ひてまう

（一）

（二）

（三）

（四）

（五）

（六）

（七）

（八）

（九）

（十）

（十一）

（十二）

（十三）

（十四）

（十五）

ありよ。堀河大納言あ

修^{コウ}さく^シしげ^シ（一）

あつまでありよ。あつまであるよ

論語^{リュウゴ}（二）

つまひう。あらひしてあるよ

（三）

（四）

（五）

（六）

（七）

（八）

（九）

（十）

（十一）

（十二）

（十三）

（十四）

（十五）

（十六）

（十七）

（十八）

惡紫史集宋也

論語^{リュウゴ}九章^{クウジョウ}則陽貨篇^{セイヨウカヒ}

九のまのうごく

（一）

（二）

（三）

（四）

（五）

（六）

（七）

（八）

（九）

（十）

（十一）

（十二）

（十三）

（十四）

（十五）

（十六）

（十七）

（十八）

（十九）

（二十）

（二十一）

（二十二）

（二十三）

（二十四）

（二十五）

（二十六）

（二十七）

（二十八）

（二十九）

（三十）

（三十一）

（三十二）

（三十三）

（三十四）

（三十五）

（三十六）

（三十七）

（三十八）

（三十九）

（四十）

（四十一）

（四十二）

（四十三）

（四十四）

（四十五）

（四十六）

（四十七）

（四十八）

（四十九）

（五十）

（五十一）

（五十二）

（五十三）

（五十四）

（五十五）

（五十六）

（五十七）

（五十八）

（五十九）

（六十）

（六十一）

（六十二）

（六十三）

（六十四）

（六十五）

（六十六）

（六十七）

（六十八）

（六十九）

（七十）

（七十一）

（七十二）

（七十三）

（七十四）

（七十五）

（七十六）

（七十七）

（七十八）

（七十九）

（八十）

（八十一）

（八十二）

（八十三）

（八十四）

（八十五）

（八十六）

（八十七）

（八十八）

（八十九）

（九十）

（九十一）

（九十二）

（九十三）

（九十四）

（九十五）

（九十六）

（九十七）

（九十八）

（九十九）

（一百）

（一百一）

（一百二）

（一百三）

（一百四）

（一百五）

（一百六）

（一百七）

（一百八）

（一百九）

（一百十）

（一百十一）

（一百十二）

（一百十三）

（一百十四）

（一百十五）

（一百十六）

（一百十七）

（一百十八）

（一百十九）

（一百二十）

（一百二十一）

（一百二十二）

（一百二十三）

（一百二十四）

（一百二十五）

（一百二十六）

（一百二十七）

（一百二十八）

（一百二十九）

（一百三十）

（一百三十一）

（一百三十二）

（一百三十三）

（一百三十四）

（一百三十五）

（一百三十六）

（一百三十七）

（一百三十八）

（一百三十九）

（一百四十）

（一百四十一）

（一百四十二）

（一百四十三）

（一百四十四）

（一百四十五）

（一百四十六）

（一百四十七）

（一百四十八）

（一百四十九）

（一百五十）

（一百五十一）

（一百五十二）

（一百五十三）

（一百五十四）

（一百五十五）

（一百五十六）

（一百五十七）

（一百五十八）

（一百五十九）</

其三
一
寺
在
光
院
の
つ
く
れ
の
内
納
ま
る
生
き
の
内
若
い
も
房

経序 世あるがよりより十代の孫
なり 経母の息子行母のまこと
いふ 模範

凡せやうよ 義ねよアセ

眞説
池柳乞翁
ゆとあらゆるのこゑを

西の音
しゆくのね
西の音
しゆくのね

乃の韻乃ちも仄音すれど韵もひづりと
善く乃る所よりて然へてとくよりて韵と中
和とよりてくふくあしもありまくふまくま
もととて乃くそくはたまくまくとよし
くそくをかくまくまくまくまくまく

多き者なりとへひやうへよ
教り 行うを庚韻カウトモ陽韻ヨウトモ之を
庚韻カウトモハカリ歩の音へ陽歌ヨウトモハ

ありあつて教りと教歩の義よとくを
庚額よりて陽教なれどあわづら色といふ
教がれあわづら
を連がよへうすまう今
院沙よハ狂人玄加ともよと云ふ者也よハ是
玄加よからぬことを教よさざるも

三塔 東塔 西塔 横川之般舟文抄、三塔の法堂
とあり、一筋人へてまづ、三塔頌礼記とのよし山門

「まことに下の堂なり。これまで去らるむ。」堂
傳ハ三塔の堂」とおもふ者へ

幸徳堂乃う
カク

常行堂　鑿穴抄云　考り堂八間經三昧乃
うちをめりて聽せり　亦之不居ハシム後之
新拾遺釋教部　山乃常行堂乃流通の

心浦上人

とがとうへう

東塔ハ止歎院東塔のみ焉若ハ津ち院をと云

理之士
成正二位太宰權帥權大納言行成

鄉圓融院御宇天錄三年誕生及一秉復
万秀二年二月薨_{五十六}公鄉補任

おまえさん それより蓮ねむ
ひきくとくてもかからぬうちに

佐署　姓名乃上より友佐と云連ひと佐署

せあたはれ

新成位署名。年月日。

那蘭陀寺 道眼

人災　憂歡苦樂尋伺出息これと八終と
了、藏乗法數より

化叶を大能化と云ふ子をも不化と云ふ
不眼の威

卷之三

貪功曾王
是湖三言完也因等之

正月三日酉時正 酒酌三宝院せ日置の
御事

「事あるを以ても無と
おあり加とへぬ乃ニ密よりおとハリ有

ノニニモ業者ノ根ニ參考シ若素トキニノ
ノイエトシ云々文段抄ニ云神經畧註二元加
寺羅少白高僧大師傳文加寺詩譜墨金

持經抄曰高聖大師禪變加持言釋
不測云神異常云變往來出入爲加攝

而不敢爲持既入我我入也一邱一明
加持力成_三行者三業入本尊三業又
本真三業人_三五人_三義九_三

李尊三業入行者三業故互入義也三
密加持速疾願云云又佛曰應衆生心

卷之二

木云加衆生心水感佛日云持釋迦所
詮者妙感妙應義也

陣乃か陣の度のまゝや隊の度ハ清涼
ありあえまさんとお供ひとすをもす

トミク

保ねみまへ 賢助傍心の間の人に

よそわよ 賢助傍心の間の間のよそわよ

よそわよ 信教人來むりと

千がれも 拙走堂より二月よりハ遣教燈

乃迄年あるし遣教燈ハ仏道樂より全

て教とさはすがふき物とぞくを度

ううち入て は掌より通入を

りんあく ひまみうちじよりひまと

きくうまを保めを

きくうと 有れま

音はまきこ人 徒をせり事など人情

そくのをもとまく人をれどやくらう

とりりんをとされくいわくと

ば事はよ うれハ善な合意ゆうき

れんはやくとすでゆく

りんく 善故ハ夙流の陽者なれを保

まんを相まもさんめと

あどくぞうはうをうりうれをびんおとをひてまくられ
年頃

る清不まぬりよつと女房の

よま下にをるに人よがもくうりとがんかとくをまふ

ましわくうふさうよつうらゆゆうとゆてや

ねげむはよゆゆ一も彼極ゆの夷はづがよひ肉よ

正人の津流くありそまくぬ女房とはくらうそ

つづく様てびんよくこともあどうさんをめぞ。其の

ありさぬアツリスコロセ興あくんとて。もううらうそ

文觀抄云は二重の月を推定取る
ううらうそとくとくあると善の

百四

八月十五日九月十二日

あれせ生みとあわりやうえ
レノア
アーヴィング著
新編

歐洲又言失都以之

卷之三

東方の作天君。ありま
うへてくゆ。きものへんわめとあひの
うみああきのあき。さへ けぬはる乃翁

源語類聚より
取扱

少
少
少

あよこちあくよみたるすくふ
いあくよみたるすくふ

是則
由今

トモ色ウミともぬきテ
モモロシニテ
ウタリ 事之ウチヨ
新勞乃トモアリ

とくにハクシム山もちうきそがえはれり
鞍馬山を別よ立入り

不似合氣
豈饑
苗義

の少主人
種姓をもつて田舎へ
今文左康秀う三河

アラモリのまゝでもござるまい

絶ゆむを守とうとくはれねとあえてまよ
あやうにまよふともあ

娘也
娘仙窟より桂心とうあり

婚期をとるより多くの方もおられ
ます。新古今、うきよをもよおす

と何とく人をもたむかわ
もあり

萬葉集卷之三

アセナカシナリハナリ
アセナカシナリハナリ

又言織乃也

あけれどもひいへよひさくまうりうり
ほせうひきくへねりうりうきふとせうあく

卷之二

わくわくする 情ううとあくじと建り
志まむれ ひきゆきめぐらすよは自

四

卷之二

比金石卷五

四
九

御よ男の子をひきあせきんと
争もあけたり男 王けることを法師あや
かあつて人よりまことわく
くあやさ あやめあやさを我子のあ
よりふよきり あつまきひととも
あくまみもくもとつまよもとく
くへともひきもせよもとんもくりせられ
むしひゆも却てもうくうりきんとうり
人とハ男の子をうりおのの人へとくえ
神乃あくまもくさむ

まゐるわからぬよあくす
みうちが京の事かわんむ
ゆうりやもじらうすさきに
あひごとくともなうん
ちゆゑをあひよざひ
了ハモリ

九月の三日をもてて内相に上りて
さうもへて東宮がおもひゆくをねら
よ難うやまどりすまへ
び段八と三月のもぐくくもとひもあくと
あやえんべくふるみわたりてのあくとひく
仕事とるがとてはよひきとある

易豐卦云月盈則食，**釋名**曰月闕也。滿則缺也。望月

満之名也日月遙相望者也
事もあらずと 痴ぢりて夢見と忘却

けまくらひりとこも
丈段折すよ人へうたはせ
よぬきもくへへうきばれのこもく
企削置云印葉用包影印露

亦如電一の如くは金剛幢と六喻幢とも云
う

向谷よ端せうふまうあり通眼よりくられハ世
ろれいとすむか想もすよしきゆめうきくへ

高麗文書抄云載斷之
心才之子用釋氏要覽云能斷金剛諭

以四句科簡。一、有身欲寂靜而心不寂
靜謂食欲比丘林下坐禪。二、有心欲寂
靜而身不寂靜無食嗔比丘觀近王臣。
三、有身心俱寂靜謂諸聖人。四、有身心
俱不寂靜謂凡夫。

一
事
成
せ
ら
う
る

1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5
6
7
8
9

放免此書ノ大変ニ難色類
ト心得ベキナリ



北金指掌圖

卷五十一

奉入重慶より久保乃江口へもそよ
とよひにゆくわがまじ段へも一主上乃

百八

八
兼
加

一念の田地は、全ら妄念の外見也。

父嬰曰子之子爲何云爲孫六之子爲
何曰爲玄孫七八之孫爲何曰不能知

佛說三身壽量無邊經曰文殊白佛言我等從昔聞如來說法如來何佛聞此

說法。四十一重內大院
兼大毘盧遮那說法。殊重。自佛言四
十一重內大院。何者是耶。世尊復言。過

十住十行十迴向十地等覺內大院義
妙寶地大毘盧遮那說法文殊重白佛
言妙覺地毘盧遮那從何佛義說法世

尊復言妙覺地毘盧遮那，無始無終
一念本佛說法，文殊重白佛言無
始無終一念本佛，羨何佛說法，世

尊復言無始無終一心一念本佛羨無
心無念本佛說法文殊重自佛言無心
無念本佛羨何佛說法世尊復言無心

無念。本佛上更無佛。陀羅尼前佛無後佛。
无心无念。本佛以不思議爲體。無本生。

來其性無不見者也云今盡不謂
之有也人情之義之經非從天降也非遁地出也人情

而已矣。故其國之多者，莫過於此。

法
之
所
謂
也

のうへて人を去り墨井^{モクイ}と號す。已^シ
をあきらめ、身^みのあはれと因^シ
九^ク萬^{マツ}人^{ヒト}の如^シく、身^みを失^フりて

の
九
月
の
事
件
は
あ
る
か

もはや此先事の述一也多く之れを知るの要され
向うへ乃ちともかく之を解としより流るゝて
是より作多く傳説補といひりたれ傳とて言
を撰せり汝が隣に於て是かれど時と教多めれ
ト高傳ヨウカとんどの事集く咸りとは是事理也
妻の家とて是道を以てはまつてのれと信され
先の事と云ふ也。 一覧

貞亨二乙酉二月吉旦

洛陽錦小路

永田長丘
御用關板

